

申立書

放送倫理・番組向上機構

放 送 人 権 委 員 会 御中

申立年月日 平成27年7月5日

(署名箇所削除)

第1. 放送局名

株式会社フジテレビジョン

第2. 番組名

カスペ!『あなたの知るかもしれない世界6』

第3. 放送された年月日と時間帯

平成27年2月17日 午後7時から午後9時

第4. 番組の問題部分

「わが子が自転車事故を起こしてしまったら」とのタイトルで始まる部分

第5. 問題となる放送内容とそれによって生じた被害の内容

問題となる放送内容と被害の内容については、放映後のフジテレビとの交渉の経緯を含めて記述するのが分かり易いので、以下、交渉の経緯も適宜織り交ぜながら、述べさせていただきます。

1 取材と放映の経緯（添付資料1「経過記録」）

平成26年11月24日、株式会社スコープの菅原和人より、中野区の「犯罪被害者等相談支援窓口」と関東交通犯罪遺族の会（以下、「あいの会」と言います）に取材依頼がありました。翌年1月下旬頃、今度は株式

会社ライスの村上浩美より連絡が入り、あいの会の会員である私が、取材に応じることになりました。私は、自転車被害の遺族に当たります。

村上浩美の話によると、「カスペ！『あなたの知るかもしれない世界6』」制作にあたり、自転車事故の遺族のインタビューも放映したいとのことでした。その際、次のような事前の説明を受けたので、そうであれば今後、同じような悲惨な被害者が現れないよう社会に対する啓発になればと考え、私がインタビュー収録に協力することになりました。

- ・自転車で事故を起こすとこんな重大な事態になるという問題提起をしたい。
- ・ただ、ゴールデンタイムの番組なので死亡事故ということは出せないの
で、相手の顔に重大な怪我を負わせてしまったという設定にする。
- ・しかし、面白おかしくでは決してなく、あくまで自転車事故の重大性を
訴える内容になる。

上記の説明が全てでした。

2 放送内容

ところが、平成27年2月17日に放映（添付資料17「DVD」）された内容は、事前説明とはかけ離れたものでした。

交差点で、小学生の男の子に、野々村真氏が演じる主人公の息子が、自転車で衝突してしまうのですが、その「被害者」の小学生は、最初から意図してぶつかってきた「当たり屋」で、そのことが随所でわかる演出になってになっていて、これを主な内容とする番組だったのです（以下「本件番組」と言います）。さらには、小学生側の代理人として登場した弁護士の言い値のままに、1500万円という、過去の裁判例と比べると二桁も桁が違う法外な金額を取られる内容のドラマとなっていました。

そして、その番組の冒頭に私のインタビュー映像が使われていました。
もちろん、私は直ぐに村上浩美に電話で強く抗議しました。

3 フジテレビが認めたこと

その後、平成27年4月になって初めて株式会社フジテレビジョン（以

下「フジテレビ」と言います）から接触があり、同年４月１０日（金）と４月２５日（土）にお会いして話を聞くことになりました。

同年４月１０日の会合は、フジテレビの担当者と、あいの会の顧問弁護士である高橋正人先生（以下「高橋先生」と言います）及び私だけのものでしたが、ここで、フジテレビに対し、取材の際に事前説明がなかったこと、自転車被害の多くは当たり屋ではないこと、私や自転車被害の多くが当たり屋であるかのような印象を与えかねないこと、あの程度の負傷で１５００万円も請求するようなことはあり得ないこと、被害者の多くがそのような法外な請求をしているかのような誤解を与えかねないことなどを抗議しました。

続いて、同年４月２５日の会合（以下「本件会合」と言います）は、フジテレビの制作責任者が出席する正式なものとなりました。出席者は、あいの会が、同会代表の小沢樹里、副代表の私、高橋先生を含む合計７名、フジテレビ側が、バラエティ制作センター室長の金田耕司氏、同部長の小松純也氏、副部長の小仲正重氏、契約調整統括担当部長の和田実氏、大川友也氏の合計５名でした。

なお、本件会合では、フジテレビの承諾を得て、録音テープを取らせていただきました（添付資料２「録音データ」 添付資料３「録音データ反訳」）。添付資料３「録音データ反訳」のうち、青字の「F」がフジテレビ側の発言です。

本件会合においては、同年４月１０日の会合で抗議したことと同じ内容の抗議をさせて頂くとともに、フジテレビから、一定の回答がありました。この時、フジテレビが認めた内容の要旨は下記の通りです（詳しくは、反訳に記載されている通りです）。

なお、会合の冒頭、出席した制作センター室長が、予め用意したペーパーを読み上げ、私に不快な思いをさせたことに対し、謝罪の言葉がありました。

記

- ① 本件番組はバラエティ番組ではなく、情報バラエティ番組であること

- ② 制作会社からの作品の買取りではなく、制作会社に業務委託して作った番組であること
- ③ 番組の公式サイトには、
 - ア 実際に体験した人々に取材し事実のみで構成されたドラマ
 - イ 実話の物語をドラマ化した「最大公約数ストーリー」などと謳っていること
- ④ 本件番組のストーリーが当たり屋に金銭を取られる話になっていること
- ⑤ 当たり屋であることは最後に明かされるが、番組冒頭からのドラマの流れは、その伏線であったこと
- ⑥ 取材に基づいた内容ではなく「架空」のドラマを作成してしまったこと
- ⑦ 1500万円の賠償金について、軽傷で完治している事案でこのような金額になることは（法律的にみて）あり得ないとの指摘、専門家に相談したのかどうかの指摘に対し、弁護士に相談したが、弁護士から1500万円という具体的な数字は出ておらず、当社側で、このようなものだろうと判断したこと

4 放送内容の問題点

（１）虚偽放送（当たり屋）

本件番組のコンセプトとして、実際に体験した人々に取材し、事実のみで構成されたドラマ、実話の物語をドラマ化した「最大公約数ストーリー」と謳っており（添付資料4「オフィシャルサイト」、5「番組紹介」）、番組の冒頭でも同じことが謳われています。

さらには、本件番組が流されている間は常時、左上に「全て実話」とのテロップが流されていました。

ところが、本件番組は、十分な裏付け取材に基づかない、噂だけで放映されたものでした。本件会合で、フジテレビは、次のように具体的に述べ、裏をとっていなかった、演出、架空であったことを認めました。

「〇ですね、あの、子どもに関しては、その一、すいません、ちょっと、しっかり

裏はまったく、と、あの一、しっかり裏は取ってないんですけれども、あの一、しゅぎ、あの一、当たり屋の、あの人が当たり屋だったかもしれないっていうような、あの一、方に取材をしたときに、ちょっとその、地区とか特定でき、あの一、お伝えできないんですけれども、あそこらへんでは子どもにやらせてる人もいるらしいみたいな話はあったんですね。ただ、まあ、それがまあ、あの、情報として、あの一、使っていていい、よかったかどうかっていうのはまた話は別なんですけれども、一応そういう話がありました。ただ、裏は取れてはいないので、まあ、あの、演出、架空というか、はい、そういう中に入ってしまうと思います。」（資料3「反訳」11頁）。

要するに、特定の地区の「子どもにやらせている人もいるらしいみたいな」噂話だけで制作したものに過ぎなかったのです。「当たり屋」に直接的にも間接的にも接触して具体的な話を聞くこともせず、「小学生の当たり屋」の存在も確認さえしていないのなら、最大公約数に基づくと公言している情報バラエティ番組の取材担当者がやるべき取材を遂行したとはとても評価できません。視聴者への裏切り行為と言えるでしょう。本件会合では、他のフジテレビ側出席者さえも、その点に対しては反論できない様子が見て取れ、落ち度を認めたものと、当日のあいの会出席者は理解しました。

また、社会の実態としても、自転車被害の最大公約数が当たり屋というのは事実と大きく異なります。仮に、当たり屋がいたとしても、極めて少数の事案に過ぎず、多くは詐欺的な『被害者』ではない通常の被害者だからです。いわんや、その少数の事案に過ぎない当たり屋の中でも、当たり屋を演じる者の最大公約数が小学生というのも、事実と全くかけ離れています。当たり屋の多くは成人です。

この点、警視庁の子どもの交通人身事故の発生状況をまとめた統計（添付資料16「子供事故発生状況」6頁下の円グラフ）によれば、被害者である子どもが歩行中である場合、60.2%は「違反なし」です。よく言われる「飛出し」は22.0%にすぎません。当該円グラフでは「当たり屋」の項目などありません。本件番組が「最大公約数ストーリー」を謳うのなら、本来であれば、被害者である子どもは「違反なし」と表現されてしかるべきところです。

以上より、本件番組は、裏付け取材に基づかない、社会の実態とかけ離れた虚偽放送に当たります。

(2) 虚偽放送（法外な賠償金）

本件番組に当たり屋として登場する小学生の男子児童は、顔面に軽傷の傷を負っただけで、番組終了時点の時系列では、完治しています。この程度の負傷で、1500万円もの賠償金を請求する弁護士はいません。もし、いたとしたら、弁護士の品位を欠くものとして、弁護士会の懲戒事由に相当するくらいです。

この程度の負傷で慰謝料として請求できる額は、せいぜい数十万円に過ぎません。これでは、交通犯罪の被害者が、あたかも非常識な高額な賠償金を請求しているかのような間違った印象を視聴者に与えかねません。

フジテレビも、専門家の口から具体的な金額を聴取したわけではなく、自分たちで、こんなものだろうと勝手に推測して提示した金額に過ぎないことを認めています（添付資料3「反訳」9頁～10頁）。

従って、この点でも、本件番組は勝手な憶測に基づく虚偽放送に当たると言わざるを得ません。

5 私に対する表面的な謝罪

以上のとおり、本件番組は、裏付け取材を欠いた憶測に基づく虚偽放送でないしこれが強く疑われる放送です。

そして、私に対する事前取材にあたって、このような当たり屋がドラマのメインとして登場することについて、全く説明がありませんでした。これは、取材方法として著しく不適切です。もし、当たり屋がメインであるとの事前説明を受けていれば、当然、私は取材には応じなかったからです。なお、事前説明が不十分であったことについては、フジテレビも本件会合の後の、同テレビ局からの回答書（添付資料9「平成27年5月18日付回答書」第1項）で、表面的な謝罪がありました。

6 フジテレビの変遷

しかしながら、一番の問題点は、表面的に謝罪があったかどうかではありません。フジテレビが、本件番組が、虚偽放送ないしそれが強く疑われる放送であることを一切認めないことです。

確かに、フジテレビは、本件会合で、取材に基づかない架空のものであったことや、賠償金についても担当者の憶測によるものであることを認めていました。従って、本来であれば、その点についてきちんと番組内容を訂正してくれるものだとは私は期待していました。

そこで、高橋先生が本件会合後、私及びあいの会の代理人として、内容証明郵便（添付資料7「平成27年5月12日付通知書」）で通知書を送付してくれました。これは、本件会合で抗議したことを文書で確認する必要があることを考えて送付したのですが、同時に、本件会合でフジテレビが認めた内容に基づいて、新たに謝罪と訂正報道を求めたものです。

内容は次の通りです。

記

1 抗議

- (1) 東に対する事前取材の際、当たり屋がドラマのメインとして登場することについて、事前に全く説明がなかったことに対し、抗議する。
- (2) 東があたかも「当たり屋」であるかのような誤解を視聴者に与えかねない番組構成であることに、抗議する。
- (3) 当たり屋が、自転車被害者の最大公約数ではなく、しかも小学生の当たり屋は皆無に等しいか少なくとも最大公約数ではないにも関わらず、あたかもそうであるかのように、実際に体験した人々に対する取材を経ない架空のドラマを仕立て上げ、交通犯罪の被害者の名誉を傷つけたことに対し、抗議する。
- (4) 当たり屋の受けた負傷の程度が軽微で完治しているにも関わらず、実際にはありえない1500万円も請求されるかのような推測に基づく番組を制作・放映し、交通犯罪の被害者があたかも非常識な高額の賠償金を請求するかのような印象を視聴者に与えて被害者の名誉を傷つけたことに対し、抗議する。

2 要望

- (1) 上記2の(1)及び(2)に関し、貴社の番組審議会に取り上げられること、東及びあいの会に対し書面で謝罪をされること、本件番組が放送されたのと同

じ影響力のある枠、たとえばゴールデンタイムの全国放送の番組枠などを使用して謝罪報道をされることを求める。

- (2) 上記2の(3)及び(4)に関し、貴社の番組審議会で取り上げられること、ゴールデンタイムの全国放送の番組枠などを使用して訂正報道をされることを求める。

ところが、フジテレビは平成27年5月18日、本件会合で認めた上記内容の一部を変質させる添付資料9の回答書(以下「本件回答書」という)を高橋先生宛に送付してきました。これは、フジテレビ側に新しく就任した代理人弁護士の大塚浩先生の名義によるものでした。

7 フジテレビの弁解の内容

(1) 当たり屋についての弁解

本件回答書によると、「弊社番組ホームページにおいて「最大公約数ストーリー」と記載しているのは、「1つの事案に限定するのではなく、複数の事案における共通点をベースとして番組を制作する」というものです。しかしながら、この方針も特徴的な部分を取り入れることを必ずしも排除するものではありません」とあります。

しかし、最大公約数とは、「2つ以上の正の整数に共通な約数(公約数)のうち最大のもの」を言い、俗には、「様々な意見に見られる最大の共通部分」を言うと言われています。

つまり、もっとも多い共通項のことであり、必ずしも特徴的なものを指すではありません。大衆受けすることから仮に印象に残りやすいものであっても、もっとも多い共通項でなければ、最大公約数とは言いません。これを見る視聴者も、最大公約数とは、その分野で最も多く起きている現象なのだなとしか受け止めません。

この点、当たり屋が複数の自転車被害のもっとも多い共通部分でないことは、前述しましたように、明らかです(添付資料16「子供事故発生状況」)、自転車被害に限定しなくても、自動車被害、歩行者同士の衝突などに分母を広げたとしても、当たり屋が複数の事例で最も多い現象でな

いことは、誰でも知っていることです。もっとも多いのは、当たり屋のような詐欺的被害ではない、普通の被害です。フジテレビの弁解は、自らの言い訳を弁護士名を借りて正当化するものに過ぎず、苦しい弁明としか言いようがありません。

さらに、「取材（調査）によって確認した事実関係に新たな設定を加えました」とも述べていますが、そもそも、本件会合で、取材に基づかない架空のドラマであったことを認めていますから、手のひらを返したかのような言い訳は、信用できません。いわんや、新たな設定を取材もせずに想像だけで勝手に加えたのなら、より一層、問題で、虚偽です。

そもそも、社会的な実態として、当たり屋が自転車被害の多くの事案に見られるもっとも多い共通項ではありませんから（添付資料16「子供事故発生状況」）、一体どのような取材でそのようなありもしない事実関係を確認したのか、理解困難です。

これに対し、本件会合では、フジテレビは、前述しましたように、特定の地区に「子どもにやらせている人もいるらしいみたいな」噂話だけで制作したことを認めています。本件回答書は、これをもって「取材」として強弁しているに過ぎません。

（２）法外な請求についての弁解

本件回答書では、「外貌に醜状を残すもの」の場合は、交通事故後遺障害12級で500万、「外貌に相当程度醜状を残すもの」で9級、2300万円を算定された場合もあると弁解しています。

しかし、本件番組の最後のシーンから明らかなように、醜状かどうかという前に、そもそも、後遺障害自体残っていませんので金額自体、法外な請求です。なお、本件会合でも、後遺障害が残っていないことはフジテレビも認めています（添付資料3「反訳」10頁）。

本件回答書はこの点、後遺障害が必ず発生することを前提としていない、症状固定前に早期決着を図ったという設定であったとも弁解します。しかし、症状固定があるとかないとか、あるいは症状が完治する前の早期解決の場合はどうかという法律家にしか分からないような厳密な設定を

しているなどというのは、本件番組を見た一般の視聴者には分かりません。

一般視聴者がどのように捉えるかが基準とされなければならないのですから、これを見る人は、そうか、あの程度の傷で1500万円も取られるのが自転車被害では多くの事例なのだ、としか理解しません。

なお、貴BPOのホームページを拝見したところ、本年2月に同番組に対するとみられる視聴者からの意見が以下のように寄せられていました。

「自転車事故での賠償額で、これまでの判例ではありえないような金額を紹介していた。実話として放送したが、根拠の提示がなく、とても信じられない内容だった。自転車事故は当たり屋を助長しかねないので、留意してほしい。」（http://www.bpo.gr.jp/?p=8022&meta_key=2014）平成27年6月24日確認）。

まさしくこの意見の通りです。本件回答書は詭弁です。

8 間違いを認めず訂正しない謝罪は空疎である

以上のように、フジテレビは現在、本件番組が取材に基づかない架空のものであったことや、賠償金について憶測に基づく法外な請求であったという前提事実自体について苦しい弁明をし、訂正報道に応じていません。

このままでは、自転車被害のほとんどは通常の被害であるにも関わらず、最大公約数が当たり屋であるかのような誤解を社会に与えかねず、しかも、そのような当たり屋が法外の賠償を請求し、それが自転車被害の多くであるかのような誤解をも与えかねません。

そして、『遺族として番組冒頭でコメントした私も、紹介された新聞報道にあるように実際に裁判で賠償金をせしめていることだし、どうせ高額な賠償金目当てで文句を言い続けているのだから、その点で当たり屋と似たようなものだ』との二重の誤解を視聴者に与えかねない状況にあります。

平成27年6月10日付の回答書等でフジテレビは、私を含むあいの会関係者に、視聴者が誤解をするかもしれないという懸念及び不快感を生じさせたことについては「配慮が行き届かなかった」として詫びる一方、視

聴者に番組が誤解を生じさせるとの認識はなく、視聴者向けに謝罪や訂正放送はしないとしています。

平たく言えば、フジテレビとしては制作の結果である番組には問題は認めず、制作の過程でこちらへの「配慮」さえできていれば懸念や不快感も生まれなかったはずと、過程のみに問題点を見出しているようです。確かに過程の段階で正直に話があれば、私は出演しない選択もできたのですが、結果的に、まったく納得できない番組に出演させられており、私の名誉及び信用は、その番組に加担した形になったことで損なわれています。制作過程だけの問題ではありません。

従って、私の名誉及び信用は、前述したような表面的な謝罪では未だ、回復されていません。フジテレビがいくらお詫びの言葉を口にしようとも、前提事実の間違いを訂正報道しないというのですから、謝罪の言葉は実態のない空疎なものに過ぎず、私の名誉と信用は回復されません。

9 私の現在の心境について（添付資料18「陳述書」）

私は現在、特に以下の点について憤っています。

第一に、当たり屋がメインの再現ドラマであることを隠し、主旨を偽って依頼をしてきたことです。村上浩美が取材してきた時期は2月8日で、放映日が2月17日であることを考えますと、再現ドラマの収録は終わっていたにも関わらず、意図して、内容を隠蔽し、相手の立場を無視し、まるで番組のパーツを埋め込むための道具でも採取するかのような取材姿勢に強い憤りを感じています。

第二に、私のインタビュー映像が、交通犯罪被害者および遺族を愚弄し冒瀆する低俗な番組の前ふりに利用されたことです。本件番組は、最初から当たり屋がいやらしく「獲物」を狙って追い詰めていくシーンから始まりました。この再現ドラマのタイトルは「わが子が自転車事故を起こしてしまったら」というものでしたが、これであれば「わが子が当たり屋詐欺に遭ってしまったら」というタイトルで放映すべき内容です。そして、私の民事訴訟直後の各紙報道「4700万円」という紙面もセンセーショナルに使われており、ドラマの中での法外な1500万円という数字の印象

から、まるで私が多額の賠償金をうまくせしめた金銭亡者のように扱われ、私も所詮は、当たり屋と似たり寄ったりだと視聴者に受け止められかねないと感じています。

第三に、抗議に対して当初、「最後に当たり屋が出てくるが当たり屋の話ではない」と意味不明な弁解をしてきたことです。私が、番組放映の当日の夜、そして10日ほどたった平成27年2月27日に村上浩美に電話で抗議していますが、そこで、同女は最後まで、「最後に当たり屋が出てくるが当たり屋の話ではない」という主張を繰り返し、また、フジテレビの人も平成27年4月10日に会って話を聞いたときも、やはり「最後に当たり屋が出てくるが当たり屋の話ではない」という主張で、あまりに理解不能で、宇宙人の言葉を聞いているように感じています。

第四に、その後の話し合いでも、内々の謝罪文で内密に済ませようとし、最終的に訂正報道という、今回犯した過ちを考えれば当然と思われる行為を拒否したことです。フジテレビは、「説明がなかったことについては謝罪文を出す、番組内容は正しいのでそれ以外は拒否する。ネット上での公表も控えてほしい」との回答をしており、新たな憤りを覚えています。

10 犯罪被害者等基本法について

平成16年12月、犯罪被害者等基本法が成立し、翌年の4月1日から施行されていますが、同法は第3条で、全て犯罪被害者等はその尊厳が重んじられ、尊厳にふさわしい処遇を保障される権利があると明記し、第6条では国民の責務として、犯罪被害者等の名誉又は生活の平穏を害することがないように十分配慮しなければならないものと定めています。

もちろん、ここで言う国民の中に、マスメディアが含まれることは言うまでもありませんし、むしろ、マスメディアによる報道被害が主に念頭にあって作られた規定だと高橋先生にお聞きしました。

このように、昔とは異なり、現在は、犯罪被害者の尊厳が保障される権利は確立している権利です。

この点、最大公約数のストーリーとはとても言えない「当たり屋」の番組に、あたかもパーツを埋め込むための道具のように私を利用し、番組終

了後に抗議をしても、一切訂正をしないフジテレビの姿勢は、私の犯罪被害者としての尊厳を踏みにじるものです。

第6．放送局に求めたいこと

以上より、本件番組によって、遺族として番組冒頭でコメントした私は、「実際に裁判で賠償金をせしめていることだし、どうせ高額な賠償金目当てで文句を言い続けているのだから、その点で当たり屋と似たようなものだ」との誤解を視聴者に与えかねない状況にあり、私の名誉ないし信用が害され、犯罪被害者としての尊厳が害されたので、まずは、放送内容について訂正報道をして欲しいと思います。

次に、訂正報道を前提に、私に対してきちんと文書で謝罪して欲しいと思います。

また、これら訂正報道及び謝罪については、フジテレビのホームページに掲載して欲しいと思います。

第7．放送局との交渉の経緯

初めて放送局に連絡を入れた年月日及びそのときの対応やその後の経緯は、以上に述べたとおりです。

ところで、フジテレビは本件会合で、あいの会の監修の下で、新企画の番組をつくりたいとの提案をされ、その後も、新番組を制作することで予先を納めて欲しいとの趣旨の要請もしてきました。

これに対し、私は、あいの会とともに、間違った内容で視聴者に誤解を与えている以上、訂正報道をしないまま新番組を作っても手のひらを返したような番組作りとなるだけで、視聴者の誤解を解くことはできないし、私の名誉や信用も回復されないと考えました。だからこそ、謝罪だけでなく訂正報道をして頂きたいと申入れてきました。フジテレビの代理人との面会を含め合計3回、制作責任者と面談するなどして、できるだけ穏便かつ建設的な解決をしようと努力してきました（添付資料6から15）。

とりわけ、平成27年5月29日の代理人の弁護士同士（高橋先生とフジテレビ側の犬塚浩先生）の話合いでは、新企画の番組を作りたいとのフ

ジテレビの解決案に対し、高橋先生の方から、新番組を作ることを前提に、それでは、その番組の冒頭に謝罪訂正報道を入れてみるのはどうか（添付資料8「平成27年6月15日付通知書」）、しかも、訂正の文言はお互いに知恵を絞り合って双方が受け入れ可能な文言として柔軟に対応することも可能ではないかとの対案を示すなどして、できる限りの譲歩と努力をして参りました。しかしながらフジテレビは、その対案すら拒否されました。

そこで、私はもちろんのこと、あいの会としても、これ以上交渉を続けても埒があかないと考えるに至り、平成27年6月15日の通知書（添付資料14）をもって交渉を終了させて頂き、本件申立てに至った次第です。